
虚構

煉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚構

【著者名】

煉

【ISBN】

278551

【あらすじ】

都内郊外、とある山の中腹にある旅館で奇怪な現象、
そして殺人事件が立て続けに起こる。
皆が皆を疑い、行動がままならない。
そんな疑心暗鬼の空間　　虚構の世界。

序章（前書き）

お初にお目にかかります。煉と申す者です。

ミステリ・推理モノのジャンルを書き綴らせて頂きます。

私自身の人生経験は決して豊富ではありませんので、至らない点や表現が甘い・足りない部分が出てしまうことがあるかと思います。

ですが、そうしたコトを踏まえた上でこの作品を読んで頂けたらこれ以上嬉しいことはありません。

この作品のテーマは『疑惑』です。

人は疑に囚われるとあまりに脆い。

そんな心理描写をメインに書けたらと思つています。それでは。

『来週は豪雨になる事が予想されます。

気象庁から大雨洪水警報が出される恐れもありますので、
お出かけの方は十分にご注意下さい。』

「・・・ここもちょっと危ないかな？」

テレビから流れる天気予報に目を向けながら、一人の女性がそう呟く。

彼女はこの旅館に勤める支配人代理。

お昼休みの今は、彼女専用の部屋で寛ぎながらテレビと軽い昼食。
これが日課だ。

今週はお客様の予約も少なく、来週は全然。

普段から真面目・誠実と言われている彼女も、そうした時はちょっとだけしてしまう。

しかしその空気を周りに見せることはまずない。

こいつして自分しかいない空間だからこそ、彼女は本心を見せるのだ。

・・・そう、彼女は人を全く信用していなかった。

幼い頃両親が亡くなつてから親戚中をたらい回しにされ、あげく施設行き。

十八歳になる頃に、施設を出てこの旅館で住み込みとして働いていた。

更に追い討ちをかけるように、そんな彼女の過去に仲居達が無遠慮なくらいに興味津々。

そして体目的で彼女と親しくなろうとする支配人。

気が付けば彼女は、人をまず疑い、全ての疑惑が晴れても尚疑う程人間不信となっていた。

歳二十八ともなると、もう早々戻らない。彼女はそんな自分自身を

完全に受け入れている。

「アイツ、いい加減下心無しで話せないのかよ。」
ついほやぐ。彼女の言うアイツとは、上司にあたる支配人のことである。

「あの手、いつかチヨン切つてやる。」

彼女がブツブツと独りで愚痴を呴き始めた丁度その時だつた。

・コンコン・

「代理、ちょっと良いですかねー?」

軽くドアをノックされた後、聞き覚えのある声。

彼女は意外な人物の訪問に少々焦りながらも応じる。

「料理長ですか?構いません、どうぞ。」

そうして開けたドアの先には、今まで調理をしていたような臭いを連れてきた料理長。

「すみませんねえお休み中に。」

「気にしないで下さい。それより用件は?」

中へ招き入れながら、彼女は出来るだけ手短に済ませたいといふ気持ちを込めつつ聞く。

「いや、実は支配人に通して欲しいお願ひがあるのですが・・・。」

「支配人に?何でしよう?」

”支配人”という言葉を聞いて若干苛立つ。しかし己の中にそれを

圧し留め、次を促す。

「実は来週、ここを貸切にして頂きたいんです。」

無論、貸切に相応しい金額は用意出来ます。」

「は、はあ・・・貸切ですか?」

現状、来週の予約は入っていない為、貸切そのものは問題無いだろう。

しかしこの旅館、実は今まで貸切にした事が無いのである。

「初の試みである為、どうにも直接支配人に伺うのはやり辛いんですよ。

代理から何とか話を通してもらえませんか?」

頼みます!と同時に頭を下げられる。彼女としては、疑う部分がまだ少なく、普段から自分に優しくしてくれる料理長のお願いということもあり、無闇に断れなかつた。

結果としてそのお願いを引き受け、詳細を聞いた後、支配人の下へ赴く彼女。

来週の自分も、いつも通りであると思い込んだまま。

週明けの日。

今日は朝からパラパラと雨が降っていた。

「そういうえば、天気予報で豪雨かもって言つてたっけ。」

そう咳き、旅館の窓から外を眺める1人の女性。

彼女の名は芙蓉槐。

この旅館【都雅】の支配人代理だ。

今日から旅館は貸切となる為、朝もゆつたりと時間が流れている。忙しくなるのはお客様が来てから。それまではコーヒーの味でも楽しもう。

そう思いながらカップに口をつけた時、不意に彼女の後ろから声がかかる。

「おはよう芙蓉君。今日の準備はもう平氣なのかね？」

「つ・・。おはようございます、支配人。準備は万全です。」

振り向く事をためらい、顔を背けたまま挨拶する。

槐に声をかけてきた男、旅館の支配人で、

名は「之富成治」と言う。

彼女の事を余程気に入っているのか、

之富は仕事以外でもしそつちゅう声をかけてくる。

無論彼女も、それが好意ではなく己の欲望を満たす為だと知っている。

だからこそ、あまりにも馴れ馴れしいこの上司には、心底イライラしていた。

「先日のような、朝からよろしくない言葉を私に言つのは、ご容赦

下さいね。」

槐は吐き捨てるように伝えながら、背後の気配を無視して「一ヒーを飲む。

誰の目から見ても、早く何処かへ行ってくれという気持ちが伝わる程だ。

その意を汲み取ったか否か、支配人は溜め息をついてから返事を返す。

「そう邪険にしないでおくれ。

・・まあ私はちょっと用事があるのでね。午前は任せで失礼する

よ。

「えつ・・・・?」

意外な返答に思わず振り返った。

いつもの支配人なら、邪険にしようが付き纏つてくるのに。明日は槍でも降ってくるのか？

「あと1時間もしないうちにお客様がご到着なさる予定ですが、それまでには?」

「すまないが戻れないと思う。お客様への対応は、君と百瀬君に任せせるよ。」

百瀬君とは、槐と同じ立場であるもう一人の副支配人のことである。元々都雅にいた副支配人は百瀬だけだったのだが、女性の視点からの意見を密接に聞き入れたいという

支配人たつての願いで、槐が選ばれたのが一年前の話。

以降百瀬は元から呼ばれていた相性で、槐は代理と呼ばれるようになつたのだ。

「今日は料理長たつての『』希望で、都雅では初めての貸切なのですよ。

もつと支配人らしい自覚をお持ちになつて下さい。」

槐は目線を合わせ、上司だと構わずハツキリと告げる。

真面目・誠実な仕事をこなす彼女にとつて、

職務放棄とも見て取れる支配人の言葉は理解出来なかつた。

「午後からはちゃんと仕事をするわ。それじゃ、頼んだよ。」

「あ、ちょ・・支配人！」

立ち上がりて呼びかけた槐を無視しつつ、一九四〇年五月二日ローバーを離れてしまった。

「・・・ふう。参っちゃつたな。」

そう呟きながら槐はソファーに座りなおす。

今更悔やんでも仕方ない。どうしても止めたければ無理にでも止めるべきだつた。

しかし普段から疎んでいる上司。

彼女からすれば、負担は増えたとしても、

上司がいないという事態のほうが遙かに精神的に楽だつた。放棄するならすれば良い。私もそのほうが楽だ。

そう思い、またコーヒーを口にする。

入れすぎた豆の、ツンとくる程の苦味が彼女を冷静にさせていた。

支配人がロビーを去つて数十分後。

受付カウンター奥の暖簾をめくつて、

長身強面の男性と、瘦身で柔軟な顔立ちの女性が出てきた。

そのうち男性のほうがソファーに座つている槐に気付き、向かつてくる。

女性も後から付いてきた。

「代理、おはようございます。」

「たっくん、女将、おはようございます。」

槐は向かって二人に気付くとすぐ立ち上がり、会釈をしながら挨拶を交わす。

たっくんと呼んだ男性は、先程支配人が言っていた百瀬君。百瀬拓である。

女将と呼んだ女性は、都雅で勤めてもう二十年になる女将、桐生さとみと美。

百瀬は強面で、一見とつつきにくそうな外見をしているのだが、実は人は見かけによらないの言葉を生き写したかのような好青年である。

いや、好中年と呼ぶべきか？

「之富以外から”たっくん”と呼ばれ、本人も訂正を求めるないので、いつの間にか

呼び方がそれで定着してしまったらしい。

槐も例に漏れず、年上にも関わらずたっくんと呼ぶことに慣れてしまっていた。

桐生は、十年前に仲居から女将になつたベテラン。

しかし支配人が女将の意見をあまり聞き入れず、ほぼ全ての事柄に対応させてもらえない

光景が目立つたりする苦労人もある。

立場と評価があまりに伴つていなため、一見すると辛そうに見えてしまうのだが、

当の本人はそれらをおくびにも出さず、常に笑顔が耐えない。

槐から見れば、仕事上尊敬出来る人ではあるが、それ以上に人が好き過ぎるという印象である。

「たっくん、支配人は午前中、用事のために対応が出来ないそうで

す。」

「えつ・・何故ですか？」

早速、仕事上の報告を始める槐。百瀬はそんな槐の報告第一声に目を丸くする。

「さあ・・。用事とだけ。詳しい事は私もさっぱり。」

「そうですか・・。じゃあ、僕等だけでも頑張りましょう。」

ええと頷き、今日の予定を話し始める。それを傍目で見ながら、桐生が

「相変わらず、たっくんは切り替えが早いのね、羨ましいわ。」

と呟いた。2人にはその言葉は耳に入らず、淡々と仕事の話を続けていた。

時刻は少し経つて、現在午前十一時手前。

3人は仕事の話を詰め終え、ロビーに座りながらくつろいでいた。

「もうすぐお客様がお見えになるわね。そろそろ外へ出ましょうか。」

桐生がそう言つて立ち上がる。槐・百瀬も続いて立ち上がった。

「そうですね。じゃあ主催でもある料理長を呼んできますよ。」

百瀬がそう言つて厨房に向かおうとしたが、遠目から来る人物を見て立ち止まる。

「あ、たっくんおはよう！女将と代理も！」

そう言いながら近付いて来たのは、今百瀬が呼びに行こうとした料理長、国府田義章（いさお）だ。

国府田は女将の桐生と同期である。

入ったばかりの国府田はまだ見習い同然だったが、

桐生が女将になる時、供に料理長に昇進した。

真面目な時や大事な時は丁寧なのだが、普段はとても気さくな人である。

「国府田君、丁度今たっくんが呼びにいこうとしてたのよ。」

「おおそつだつたのか。手間かけさせなくて良かつたわ。」

桐生と国府田は、同期といつこともあってか大変仲が良く、長く友人としてやつている。

その為お客様のいない会話では、いつじてタメ口で話すことも珍しくない。

「お迎えする人は揃つたようですし、外へ出ましょうか。」

そんな2人を見つつ、槐が切り出す。皆軽く頷き、先に歩き出した槐に続く。

役者が揃いつつあることを、知る由もなく。

開示・壱・（後書き）

今回は登場する人物達の名前や、軽い背景となりました。

次回の更新は・・・恐らく不定期です。

申し訳ありません（汗）

午前十一時手前。

槐・百瀬・桐生・国府田の4人は都雅の入り口に立っていた。

「・・・そろそろかしら。」

槐が右手元の腕時計で時間を見ながら呟く。

丁度その時、入り口の門から一台の車が入ってきた。
車は黒塗りの高級車で、都雅で使う送迎車だ。

「来ましたね、時間。ピッタリだ。」

そう言つたのは百瀬。そう言つてゐる間に、車は槐達の待機してい
る旅館入り口、

その目の前に来てゆつくり止まつた。

車の中から降りてきたのは、3人の男女。

「小野塚様、東雲様、真田様、本日は都雅へ、よつこいらっしゃ
いました。」

そう言ひながら、女将の桐生が頭を下げる。

槐、百瀬、国府田も桐生と同時に頭を下げ、旅館やホテルでの
お出迎えらしい形となる。

「いいえ――義章からのお誘いで来た身ですから、そんなご丁寧に
なさらずに！」

それにわざわざ貸切にしてもらひつちやつて、
「ひとつお礼を言わなきやいけないくらいです。」

その雰囲気が、とても付き合ってやすい女性という印象を受ける。 おのづかほたる 小野塚萤とこの女性。

小野塚に続き、もう2人も続く。

一方は、オドオドした感じの少し頼りなさが垣間見える男性。
もう一方は、目線を吊り上げていかにも不機嫌そうに見える女性。

「ほーら!圭介と未来も挨拶しなよー!」

と小野塚が声をかけると、2人もすぐに挨拶してきた。

「ビ、ビとも。真田圭介といいます。

今田から数田間 よりじぐお願いします

慌てて挨拶したよ」と少し言葉がどせたこの男性は、眞田圭介と
いう。

見た目からは頼り無さそうな、大人しい感じの印象。

「東雲未来です。数日間、お世話になります。」

落ち着いた物腰で挨拶をしたのは、東雲未来という女性。

不機嫌そうに見えたけれど、挨拶する際には悪印の欠片も無い程。むしろ物腰柔らかで、落ち着いた大人の女性という雰囲気を感じた。

「お客様、ようこそ都雅へ。私は副支配人の百瀬と申します。お荷物をお預かり致します。どうぞ中へ。」
百瀬がそう切り出し、槐は3人の荷物を預かる。
そして中でチェックインを済ませた3人は、
女将と百瀬の2人で部屋へと向かつていった。

「いやー代理、話を通してもうひとつ本当にありがとうございました。

「槐はチェックインしたデータを纏めていたのだが、隣にいた国府田が不意に話しかけた。

「お気になさらないで下さい。こうした、貸切というのも勉強になりますから。」

「ははっ、殊勝な心がけですね、素晴らしい。」

槐の生真面目な態度に、国府田は軽く返す。

「でもね、これが最後の機会かな・・なんて思つたものですから。」

「・・・最後の機会?」

国府田が突如意味深な言葉を発し、槐が疑問をぶつけた。

「圭介と未来、あの2人警察なんだけど、まだ2人が新米だつた頃はね、

「2人は夫婦だつたんです。」

「だつたということは・・今は。」

「ええ、1年くらい前に離婚しました。」

「そうだつたんですか・・・。」

ふうと溜め息をついてから、国府田が過去を語り始める。

「元々俺達4人は大学の先輩後輩でしてね。」

「男女4人のくせに随分気楽にやれてたんです。」

「各々就職先が決まって、当時から付き合っていた圭介と未来が警察に。」

「蛻は接客業、俺は都雅の見習い料理人になった。」

「卒業してから1年くらい経つてかな、2人が結婚を報告してきてね。

あの頃は2人供新米刑事だつたから、まだ大丈夫だつたのかもしない。」

「だけど・・代理は知つてますかね? 6年前の園児誘拐殺人事件。」

「あの事件で指名手配された犯人を、たまたま未来が捕まえたんだ。それから昇進、昇進の繰り返し。気がつけばあつという間に警部。」

「

「その頃から2人の生活に致命的なズレが出たようですね。未来が警視になつた辺りでは、もう修復不可能だつた。」

「別れは起つて起きた。まあそれは仕方の無いことです。」

「ただそれ以来、未来の奴が変に俺等にまで遠慮しちやつて。」

「そのうえ転勤まで決まつて、三つ四年くらいは会えないってのがわかつたんです。」

「ただでさえ疎遠になりかけてるのに、転勤したんじゃ、もういつ関係が切れるかわからぬ。」

「だから虽と2人で、もつ一度昔みたいに戻る手段を練つていたんですね。」

「勿論、圭介と未来にとつては余計なお節介かもしませんが・・・

私は、せつかくこの年までやつてこれた友人達を

そう簡単に手放したくなかったんですね。」

そこまで話しあると、国府田は深い溜め息をついた。

「まあ、四十を過ぎたあたりさんとおばさん、最後の抵抗つてやつですよ。」

「そんな事情があるとは知りませんでした・・・」

槐はそう答えながら、バツの悪そうな顔をする。

正直な話、槐自身にとつては、そんな事などどうでも良かつた。自分はただ、副支配人としての責務を果たせばそれで問題無いと。

料理長の、そして小野塚さんのやうひとしていることは、自身が言つたように間違いなく”余計なお節介”になると思つ。四十を過ぎた大人なんだから、各自自力で何とでも出来る年だ。わざわざ他人の力を借りずとも、何かしらの決着や結論へひいつけられる。

自分には生涯、縁の無いであろう話だ。

その時の槐はその程度に考へ、それ以降は黙々と仕事をこなすことに集中した。

外では兩足が強まり、いよいよ本降りにならうとしているの。

開示・武・（後書き）

ご無沙汰の投稿です、煉です。

不定期にも限度つてものがあるだらう、とにかくレベルに
期間が空きすぎてしましました・・・。

今後の投稿も不定期なのは変わらないと思いますが、
今回程の長期間を空けぬよう、精進していくたいと思ひます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n78551/>

虚構

2010年10月18日11時05分発行